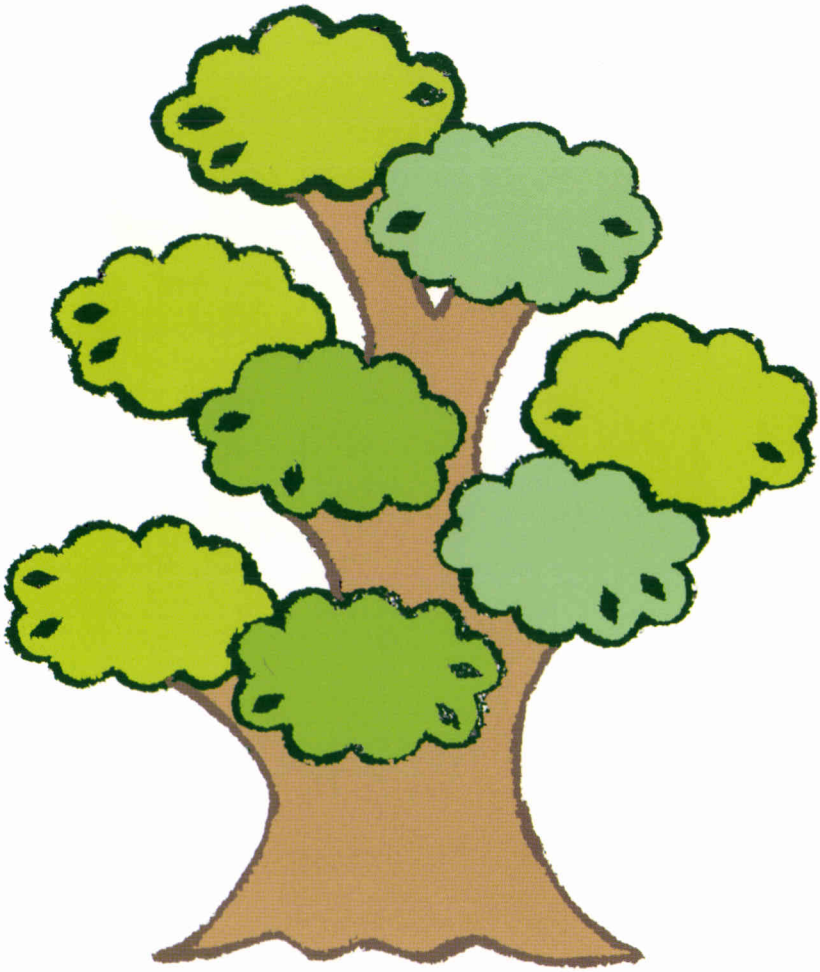
神の民
LAOS講座　第７号

宣教と奉仕の理論と実際



日本福音ルーテル教会

神の民
LAOSの樹

⑧「世界」の中のキリスト者
家庭と職業への召命
キリスト者と生命倫理
キリスト者と社会問題
人権・正義・平和・環境保全
情報化/グローバル化
⑦宣教と奉仕の理論と実際
教会は「宣教共同体」
神の民・「信徒と教職」
宣教と奉仕の具体像
牧会的カウンセリング
教会のディアコニア
⑥信仰継承
旧約聖書に見る信仰継承
小児洗礼と親・教保・教会の役割
堅信教育モデル
教育カリキュラム
祖先と死者の記念
⑤教会の歴史
初代教会の歴史
宗教改革の展開
現代教会の流れ
ＪＥＬＣの歴史
自分の教会の歩み
③教理問答・諸信条
小教理問答書の展開
アウグスブルク信仰告白
ニケア信条と教会再一致
義認の教理とルーテル教会
日本の社会・文化の中で
信仰を告白すること
②説教の聴き方・語り方
聖書日課（ペリコペ－）の意味
説教の主題発見
説教の構成と表現
霊的な奉仕への召命
説教の展開としての牧会
④「聖書」とその読み方
「聖書」の読み方
救いの歴史の道筋
聖書の各書を読む
聖書とその周辺
「私」の聖書ノート
①礼拝の意味と実践
教会は「礼拝共同体」
教会の暦と礼拝
礼拝と音楽・会堂建築
式文の構成と会衆の参加
公同礼拝の司式者の役割
祈り・聖書
宣教共同体
家庭と社会
礼拝共同体

もくじ

★ＬＡＯＳ講座へのお招き……2
Ｉ．宣教と奉仕の理論と実際……江藤直純
はじめに……4
　１．教会は「宣教共同体」……5
　２．神の民・「信徒と教職」……14
　３．宣教と奉仕の具体像……20
　４．牧会的カウンセリング……32
II．教会のディアコニア……松隈貞雄　38
★あとがき……44
付表１日本福音ルーテル教会と関わりのある社会福祉の働き……46
　　２日本福音ルーテル教会と関わりのある幼稚園・保育園……47

LAOS 講座へのお招き

信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。―これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年５月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながら、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4:19）、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3:12）。

LAOS（ラオス）として

PM21の第二プロジェクト（P2）の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS講座」と名づけました。LAOS（ラオス）、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」（ラオス・セウー）という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教会的信仰また生き方を目指している点です。LAOSという言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教会の中心であり、教会そのものだという考えに貫かれています。

証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

教会の輪の中で

「LAOS講座」の第一期の学びは別掲の「LAOSの樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教会の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2004年10月

日本福音ルーテル教会宣教方策21（PM21）
プロジェクト2（P2）委員会

はじめに

●「さあ、宣教について語り合おう」と意気込んでみても、なにか下腹に力が入らない感じがありませんか。というのも、フクインセンキョウといっても、なにかよそ行き言葉みたいでお腹にストンと落ちる感じがしない、つまり、自分の言葉にはなっていない借り物のような気がする方が案外いらっしゃるかもしれません。布教、いえそれよりもプロテスタントでは伝道という言葉が一番しっくりくるでしょう。もちろん、いい言葉です。

●けれども、戦後新しく宣教ないし福音宣教という言葉が広がりました。それは、み言葉が宣べ伝えられる行為はなによりも神さまご自身の働きであり、わたしたち（教会）はその使命と働きに召し出され、参与し、派遣されるのだという考えが重視されるようになりました。また、改宗者獲得が目標ではないという考えさえ出てきました。

●でも、わたしたちはこう考えます。神さまの働きは、この世界全体におよび、そこではキリストへの信仰を持つ人々を生み出すこともなされるし、この世の人々に仕えることもなされている、と。ですから、日本福音ルーテル教会は自らの務めを「福音に生き、社会に仕え、証しする」と明確にしました。「宣教方策21（PM21）」はその路線に立っています。けれども、奉仕と無言の証しだけが強調されるならば、それは明らかに誤りです。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ16:15）とは復活の主イエス・キリストご自身の言葉です。福音を伝え、キリストを信じる人々の輪が広がるように祈り、務め、励むことは教会の永遠の使命です。

●昨今の統計が示す伝道の困難はよく承知しています。でも、「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい」（IIテモテ4:2）。わたしたちのもう一つの確信は、この務めに召されているのは、牧師だけではなく、信徒もみなそうだということです。これからの福音宣教の重要な鍵はこの分野での信徒の貢献だと確信しています。ですから、このLAOS講座第7号はひとりでも多くの信徒が宣教と奉仕への理解を深め、関心を高め、実践へと喜んで赴いていくようになることを願って用意しました。

共著者　江藤直純

1．教会は「宣教共同体」

●奇妙な言葉「吉事家」

キリスト教が幕府によって厳しく禁止されていた江戸時代のこと、切支丹のことを書きとめた文書の中に「吉事家」という言葉が見出されます。文脈からいって、今の教会のことを指しているようです。さて、この漢字三文字でなんと読むのか。答えは「キチジヤ」です。えっ、教会はキチジヤ？　どうして？？

当時、教会という訳語はなく、ギリシャ語からラテン語になった原語の「エクレシア」をそのまま使いました。エクレシア→エクレジャ→エケレジャ→ケレジャヤ→……→ケチジヤ→キチジヤ。その音に漢字を当てはめたのです。おそらく、偶然これらの漢字が選ばれたのでしょう。それで「吉事家」。

●一つひとつの漢字に隠された意味

この三つの漢字を手がかりに考えると、「吉」はおみくじの大吉の吉です。めでたいこと、嬉しく、喜ばしい、幸いなこと。吉のつく熟語は「吉報」、良い知らせです。なんと、「福音」と同じではありませんか。聖書は告げます、人間にとっての本当の幸せを。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。この喜びの知らせを受けた者たち、この喜びに満たされた者たち、それがキチジヤ。

ヨハネ3:16

「家」は家族のこと。「あなたがたは、……聖なる民に属する者、神の家族であり」と、使徒パウロは断言しています。教会とは「神の家族」のことなのです。

エフェソ2:19

そして、「事」。この漢字の訓読みは「つかえ

る」です。「仕える」に通じています。師事するというのは先生にお仕えすることです。奉仕する、相手を生かすために身を粉にして働く。その心は相手への愛にほかなりません。「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです。」

ガラテヤ5:13—14

●キチジヤが教会

神さまからイエス・キリストを通して愛され、罪赦され、生かされ、永遠の命の約束をいただいた共同体［吉］。それゆえに、その吉報を分かち合い、告げ知らせる共同体。そんなに愛されているのだから（神さまに仕えられているから）、私たちもまた隣人を愛し、隣人に仕えることへと召し出された共同体［事］。その共同体こそは神の家族［家］！　それがキチジヤ、それが教会。

吉報をもらったら、それを自分の懐にしまいこまず、次の人に回すのです。喜びの独占禁止！その知らせを受けて嬉しかった人だけが、自信を持って、これはいい知らせだよと人に言えるのです。はにかみながら、あるいは、人前も憚らず大声で。使徒パウロも言っています、「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。」

Ⅰコリント15:3

そのような教会の本質から、教会は「伝道し奉仕する」、つまり「宣教する」共同体と呼ばれます。宣教（ミッション）とは、神からその使命（ミッション）を託され、そのために派遣（ミッション）されること。つまり、宣教共同

体とは、神の使命をいただき、その実現のために派遣される共同体。その務めを広い意味で福音の宣教と言うのです。

●なにより礼拝を通して　この福音宣教は、いつどこで起こるのでしょうか。それは、言うまでもなく、先ず礼拝の場においてです。それはなにも「伝道礼拝」と呼ばれる特別なときだけではありません。なぜなら、礼拝とは、すべて福音宣教のときなのです。ルター派は特に、次のように礼拝を理解します。普通そう考えるように、人間が神さまに、賛美や感謝、献身献財をして、あるいは犠牲を捧げて、「奉仕する」という意味ではなく、神さまが人間に――罪人である人間に――、み言葉と聖餐を通して、招きや赦し、命の福音、祝福を与えることによって、「奉仕してくださる」ことである、と。つまり、私たちが神さまに「奉仕していただく」のです。勿論、そのように神に奉仕していただき、豊かな恵みを頂戴すれば、必ずや人間の側から賛美や感謝、献身献財などの応答が生まれます。「人間からの神への奉仕」が起こります。しかし、**礼拝とは第一義的には「神さまからの人間への奉仕」です。**

ですから、この神さまが人間にしてくださる奉仕が明らかになるのが礼拝ならば、そして、それに伴って、人間の神さまへの感謝と賛美の応答がなされるのが礼拝ならば、**先ず何よりも、礼拝そのものが福音宣教の場である**ことは明らかです。生き生きした礼拝を行なうことが、取りも直さず福音宣教がなされることです。誰に向かって？教会の内外のすべての人にです。信徒、求道中の者、無関心の人。ですから**どの礼拝もすべて伝道礼拝**です。

●礼拝＝宣教という視点で捉えなおそう

キリスト者とされた私たちのなすべき第一のことが礼拝だということを、今一度、宣教という視点から捉えなおしてみましょう。礼拝の構造のうち、私たちが神に対してなしていることが何であり、司式者や牧師を通して与えられる神からの恵みが何であるかを、はっきりと捉えてみましょう（式文の各項目に上向き↑＝人から神へ、下向き↓＝神から人へ、横向きの矢印↔＝人間同士、をつけてみましょう）。そうすると、**礼拝の宣教的性格がはっきりします。**

また、神さまがどのようなお方であるかを言い表すのは、聖書朗読と説教だけではありません。信仰告白も、讃美歌も皆そうです。ですから、**会衆＝信徒たちもまた、神に向かってと同時に、世界に向かって、この神さまが一体どのようなお方で、どのような素晴らしいことをしてくださったのか、そして今もなお、してくださっているのか、を証ししている**のです。

このような役目を果たしている礼拝というものを作り上げるために、その準備から、礼拝の中での様々な奉仕、表に出る奉仕から目に見えないところでの奉仕に至るまですべてが、福音宣教に仕えているのだということを改めて自覚し、喜びと畏れを持って、私たちにできることをしていきたいと思います。

●生きる現場、生活そのものを通して

でも、礼拝だけが伝道だと考えるのは間違っています。「兄弟たち、……あなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」。これは、あなたの体を人身御供あるいは人柱として犠牲にしなさい、と恐ろしいことを命じているのではありま

ローマ12:1

せん。あなたの命を、ということは、取りも直さず、**あなたの生活を、また人生を神さまの御用に献げなさい**、と言っているのです。いえ、あなたの生活が既に「あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です」。私たちが、**その生活が、「キリストの手紙」だというのです。**

IIコリント3:3

生活の中で、ということは、具体的に生きる上での喜びや悲しみ、痛みや苦しみに遭遇している人との出会いの中で、私たちの言葉と振る舞い、関わり方、存在そのものが「キリストの手紙」になると言われているのです。伝道とは、偉そうに人生の道を説いて教えてあげることよりも、**キリストを通して示された神さまの愛を証しする**ことならば、**生活の中でこそ、その真価が発揮される**のです。私たちの教会の信仰は、そのような反応を示しているでしょうか。

●キムヤミーのこころで　沖縄の言葉で、心、心臓が痛むことを「キムヤミー」と言うそうです。新約聖書で「憐れに思い」（例えば、追いはぎに襲われ半殺しの目にあった人に対して、サマリヤ人が抱いた感情）は、原語では「はらわたが痛む」という意味です。

ルカ10:33

他者の境遇への深い共感、共歓共苦の心が、その人への具体的な援助の行動へと駆り立てます。もしその人が、「人間らしい」あるいは「人間にふさわしい」生き方をするのに困難を覚えているなら、手を伸ばさないではいられないのです。あのサマリヤ人がそうでした。最後

の審判のとき、王によって永遠の祝福を受けた人たち、すなわち、「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」人たちがそうでした。彼らはみな、期せずして、**神の御心を実行に移した**のです。

マタイ25:34—40

使徒パウロは勧めています、「**喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい**」。そこから奉仕が出てきます。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために……来たのである」、こうおっしゃったイエス・キリストの範に倣うことです。

ローマ12:15

マルコ10:45

今の時代に、現在の日本社会と世界で、これらの例は、具体的にはどのような行動、生き方をすることなのでしょうか。おそらくその答えは、頭の中で考えることではなく、現実の出会いが自ずと教えてくれるでしょう。キリスト者個人として、教会としてよく考えてみましょう。そのような奉仕もまた神の宣教の一環なのですから。

●神さまから委託を受けて

覚えておきたいことは、伝道も奉仕も、それをするもしないも、私たちの考え方次第、気分次第ではないということです。明確に、復活のキリストから「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」と**宣教の委託を受けている**のです。

マタイ28:19—20

マルコ福音書は、もっと端的に、主のご命令をこう伝えています。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」。あ

マルコ16:15

る神学者が言ったように、**火は燃えていなければ火ではなく、教会は伝道していなければ教会ではない**のです。

良いサマリヤ人のたとえの結びは「行って、あなたも同じようにしなさい」でした。イエスさまからの、愛の生き方への招きと促しの言葉です。

ルカ10:37

●癒される側から癒す側へ

教会の看板に書いてある聖句で一番多いと思われるのは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから……、わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」でしょう。私たちは、教会に癒しと安らぎを求めます。世の荒波に翻弄され、傷つけられ、居場所が見つからなくなり、生きるのが辛くなったとき、教会に愛と救いを求めます。——教会は、そのような傷つける人生の旅人にとってのオアシスなのです。

マタイ11:28—30

このオアシスは、不思議な変化が起こる場所でもあります。癒された人たちの心と体の中で、新しい何かが生まれるのです。ガリラヤでの宣教のため、町々村々を巡り歩くイエスさまのお供をしたのは、十二弟子だけではありませんでした。「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった」。しかも、主の十字架を見届け、死の苦しみを間近で分かち合い、さらには復活の証人第一号になるまでに、お仕えしたのです。彼女たちの魂の奥深くで、確かに変化が

ルカ8:2—3

起こったのです。それがゆっくりとであるか、劇的にであるかは、どちらでもいいことです。**癒される側から癒す側へ、仕えられる側から仕える側へ、宣べ伝えられる側から宣べ伝える側へ、**表に出るか裏方に徹するかは別として、**そのチームの一員になっていく**のです。教会の二千年の歴史は、そのような有名無名の人々の、途切れることのないリレーなのです。受け継がれたバトンは信仰、十字架と復活の主への信仰。その選手たちの集団を教会と呼びます。

〈まとめ〉

教会とは、神さまから罪の赦しと永遠の命の約束をいただき、それゆえ、その良いおとずれを告げ知らせ、また隣人に奉仕するという使命に召し出された宣教共同体である。礼拝を通して、また生活を通して伝道と奉仕に励むよう招かれている。

〈話し合いのために〉

① 「吉事家」は今の「教会」を指します。吉・事・家、その一字一字に言葉の意味があります。テキストに基づいて「教会」の原点を考えてみましょう。

② 私たち信徒がなすべき第一のこととは何でしょう。また、私たちに出来ることは何かを考えてみましょう。

③ 私たちの日常の生活の中で、それぞれの立場や職業の中で、自らが体験した神の愛の証しについて語り合ってみましょう。

④　今、あなた自身の「キムヤミー」は何ですか。具体的に、他者への深い共感があなたを動かしたとすれば、それはどんなとき、どんなことでしたか。

2．神の民・「信徒と教職」

●思い出せ、洗礼を受けたときのこと

信仰を持って生きることを始めるキリスト教の式は、洗礼式であり、それに続く堅信式です。洗礼式では信仰告白があり（本人ができるときもあるし、幼かったら教保と会衆が声を合わせて唱和する）、三度の水の洗いがあります。

その後の堅信式では、「この兄弟・姉妹を恵みによって育ててくださった神に感謝し、彼・彼女（ら）を**祭司のひとり、み国の同労者として受け入れ、共に福音の使節となるように、互いに祈りなさい**」と会衆に向かって勧めがなされます。洗礼と堅信を受けた人は、もはや自分がキリストの救いに与からせていただいたというだけではなく、自らもまた「祭司のひとり」「み国の同労者」、そして「福音の使節」だというのです。使節は、新共同訳聖書では「**キリストの使者**」と訳されていますが、英訳ではアンバッサダーと書かれています。アンバッサダーとは「**大使**」です。一国を代表し、その国の政府と国民の思いを伝える役です。ここでは、**神の国の大使**なのです。私がキリストの国を代表するなどと想像しただけでも、恐れ多くて縮み上がってしまいそうですが、堅信式で牧師は、私たちを「祭司のひとり」「み国の同労者」「福音の使節／大使」となるように祈ることを求めています。それは牧師の願いというのに留まらず、キリストからの委託なのです。そのために「聖霊の賜物」を求めて按手がなされるのです。

IIコリント5:20

●伝道するのは牧師だけ？

ここまでの話で明らかなように、**神さまの御心を伝えることを託されたのは、神の民**です。神の民全体です。「あなたがたは、選ばれた民、

王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです」。あなたがたが、そうです、私たちが「広く伝えるためです」。

Ⅰペトロ2:9

ですから、いつの頃からか私たちの間に染み付いた「**伝道は牧師の仕事」という誤った観念**から、一日も早く解放されましょう。もちろん牧師は伝道します。それが牧師の生涯かけた務めです。説教をします。主日ごとに神の言葉を世界に向かって語ります。諸々の伝道の企画を立て、その実行に先頭に立ってあたります。公に語るだけでなく、神の言葉が一人ひとりに意味あるものとして届くように最善の手を打ち、こまやかに配慮をします。それを牧会といいます。

でも、そのことは、牧師だけが伝道するということを意味するのでは全くありません。むしろ牧師には、教会全体が、つまり、神の家族全体が、今ここで彼らなりにできる形で、伝道の働きに参与できるようにするために、ヴィジョンを示し、信徒の信仰を養い、教育・訓練し、力づけ、生きる現場へと送り出す責任があります。「聖徒を整えて奉仕の業をさせ、キリストの体を建てさせ」ることでしょう。

口語訳・エペソ4:12

ルーテル教会の伝統では、牧師職は専ら説教職でありましたし、また牧会職でした。教会の憲法上の名称は教師です。正しく聖書と教理を教える責任があります。けれども率直に言えば、全体としては、伝道と奉仕のために信徒を教育・訓練することは、優先順位の高いものではなかったのではないでしょうか。でも、これ

はとても大切な務めです。

●ミニ牧師ではなく、フル信徒に

立派な信徒といわれる人は、牧師の小型版（ミニアチュア）ではないのです。牧師が信徒の理想型（モデル）でもないのです。仏教でも出家と在家に分かれますが、在家は出家の前段階ではないのです。キリスト信徒もそうです。牧師予備軍でもなく、牧師より一級下の身分でもなく（もちろん、一人でも多くの献身者は生まれてほしいのですが！）、有給であれ無給であれ、**世俗の仕事・生活に就きながら、信仰者として生きるというあり方への召命**を受けているのです。ルターが聖職者への召しだけでなく、さまざまな職業（家庭も含めて）に携わることも「ひとつの神さまからの召し」であるという召命観、職業観（＝天職「**ベルーフ**」観）を打ち出したことは画期的なことでした。

信徒の最大の特質は、「この世性」だと言えます。この世の只中で生きることです。さまざまな分野の専門職として、家庭であれ、学校であれ、会社であれ、社会という大きな有機体を構成し、動かしているその一部のそのまた一部として、信仰を持って生きることが、神さまから与えられた使命なのです。なぜなら、神さまはお造りになったこの世界を、私たちに託しておられるのです。よく耕し、手入れし、管理し、そこに新しいものを生み出していくようにと。そして、あのイザヤ書などに描き出されている平和（シャローム）に満ち満ちた世界を造り出すように、たくさんの人間を必要としておられるのです。

イザヤ11:1—10

ですから、そのためにこの世を生きる信徒が必要なのです。そして、この世界を生きている

無数の人たちに神さまの御心を伝え、かつ、その人たちと神さまの御心に叶った世界を創造していくためには、彼らとこの世で同じ生活を営んでいる信徒たちが、証しと奉仕をすることが不可欠なのです。

繰り返しますが、伝道のため、福音宣教のために、この世を生きる信徒がなくてはならないのです。信徒が牧師のパートナーとなり、また証しし奉仕する信徒となるために整えられ、力づけられることこそが、神さまがお望みになっていらっしゃることです。**礼拝はそのためにみ言葉と聖礼典による充電の場、教会はそのような信徒の交わりの場**なのです。そこへと人々を招き入れ、**そこからこの世へと送り出す場**なのです。信徒が目指すのは、フルに信徒である生き方なのです。

●信徒には入っていけない場所はない

信徒の働きは、人間の生活のありとあらゆる領域にまたがっています。職業や学問の種類だけでなく、地域的にも、人種も文化も言語も社会層もイデオロギーも、宗教さえも超えて広がっています。こんな強みはありません。ですから、**信徒にとっては、どこもバリアフリー**です。

もちろん、いつでもどこででも直接的な伝道をすることができるかと言えば、それは制約されています。けれども、それでも、「存在」できるのです。**キリストへの信仰を持って生きている一人の人間として存在することはできる**のです。その存在が許されており、求められており、祝福されており、励まされているのです。

●信徒もまたみ言葉を語る

信徒の働きの重要さ、代わりの利かない掛け替えのなさは、もう十分お分かりいただけたことでしょう。ただし、信徒の働きの場が、社会の中であるという面だけが強調されたきらいがあったかもしれません。しかし、そうではありません。**信徒に与えられたさまざまな霊的な賜物は、すべて教会のため、礼拝のためにも用いられる**のです。いえ、そこでこそ、この世で磨かれた才能が神さまに祝福されて存分にその力を発揮するのです。

アメリカのルーテル教会などでは、信徒が司式に加わることも神学的に支持され、早くから実践に移されています。証しや奨励という形だけではなく、「**信徒もまたみ言葉を語る**」という神学的確信のもとに、信徒も主日礼拝の中で**説教の奉仕**もするということの公の共通理解が、2004年の日本福音ルーテル教会の総会で承認され、信徒説教者の養成と認定、委託に関する必要な規則作りが2006年の総会で定められることになりました。霊的な奉仕の面にも大いに道が開けてきました。この新しい展開は、確かに牧師不足という現実をきっかけにして起こったことではありますが、二千年の教会の歴史を遡ってみると、本来的な姿なのです。[LAOS講座第2号『説教の聴き方、語り方』を特に参照のこと]

これまで信徒の奉仕と言えば、オルガンの奏楽とか生け花などを除けば、あとはもっぱら裏方の仕事、黒子の役回りでしたが、司式に参加したり、み言葉を朗読したり、証しをしたり、さらにはみ言葉を説き明かす説教の奉仕をしたりできるように、霊的な専門職である牧師が、信徒の方たちとの共同作業の中で、良い指導と

貢献をしてくださることが期待されています。

〈まとめ〉

信徒は皆、洗礼と堅信によって「祭司のひとり」「み国の同労者」「福音の大使」となるようキリストの委託を受けている。だから、信徒として責任を持って宣教に関わり、み言葉をさえ語るのである。

〈話し合いのために〉

① 堅信の後、私たち自らが「祭司のひとり」「み国の同労者」「福音の使節」だと述べられています。それがキリストからの委託だということに対して、あなたはどう考えますか。

② ルターは、聖職者だけでなく、私たち信徒も「この世性」の分野で、つまり様々な職業を通して「神からの召し」を受けていると説いています。私たち信徒には、「伝道は牧師の仕事」という考え、観念が染みついていますが、それらを払拭するにはどう考えていくべきか、語り合ってみましょう。

③ 「ミニ牧師」と「フル信徒」の違いを話し合ってみましょう。

④ 「信徒もまたみことばを語る」ために必要な条件を列挙してみましょう。

3．宣教と奉仕の具体像

●伝えなければ伝わらない

一緒に暮らしている家族だからと言って、心の奥まですべて以心伝心、言葉抜きで伝わるものではありません。極端な話ですが、親が亡くなり、子どもが仏式で葬儀をあげた後で、教会員だったことが分かった例もあるのです。「後ろ姿の伝道」「背中の伝道」ができたら素晴らしいのですが、当然のこと、そう簡単ではありません。**言葉を媒介にすることは、場を心得れば、必要なことです。**

「キリスト教をどう思いますか」との質問に、「触れたことがないから分からない」との答えは意外と多いのです。教会から、クリスチャンから誘われたことがない人は、まだまだとても多いのです（誘われても教会に来たことのない人が多いのも事実ですが）。

家族の中で、その気になれば目に触れるところにキリスト教のパンフレットや書籍が置いてありますか。**うちの中に、信仰を表す何かが見えるようになっていますか。**どうしてクリスチャンなのか、聖書には何が書いてあるのか、キリスト教の教えとは一体何なのか？もっと個別具体的な問題（なぜ戦争をするのか、中絶は認められるのか、死んだらどうなるのか、等々）への対応を聞かれるほうが多いでしょうが、そのとき**答える用意がありますか。**実際にどのくらい**熱心に誘っていますか。**

Ⅰペトロ3:15

●お客様を招く心

やっとのことで、ある人が教会（礼拝）に行ってみたいなと思うようになったときのことを考えてみましょう。さて、教会はどこにあるかなと探す気になったとき、**教会は外から分かり**

やすくなっていますか。中ではどんなことをやっているか、入る前に外から分かるようになっていますか（集会の案内、教会の紹介やメッセージ、歓迎する言葉などが表に出ていますか）。最近はインターネットで見つけてくる人がとても増えていますが、それへの対応はできていますか。デパートで買い物をする前に必ずするのが下見、ウィンドー・ショッピングです。一度入ったら出られないというのでは心配になるので、踏み込む前に自由に拘束されずに見てみたいのです。そういう**開かれた感じがあなたの教会にありますか。**

兼牧態勢では、電話がかかってきても留守の教会から牧師宛てに転送されるようになっていますか。問い合わせにすばやく反応できるような仕組みになっていますか。

教会はきれいですか。「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙あふるる」－神社仏閣の持つ宗教的な静謐さとは違っていても、教会はそれ独特の清潔感やあたたかさ、**どこかふつうの空間とは違うたたずまい**といったものを醸し出しているでしょうか。教会は内輪の人だけで長く居ると、ついつい散らかっていたり古い印刷物が置きっ放しになっていたりしても平気になってしまいがちです。**聖なる空間にふさわしく！**これは建物の古い新しいとは関係ないことです。

我が家にお客様をお迎えする心といったらいいでしょうか。心したいものです。

●信徒のこんな役割あんな役割

信徒が福音宣教の働きを担うというとき、実にさまざまなやり方が考えられます。そして、そのことは、いわゆる教会的専門職（たとえば

オルガニスト）だけではないということを先ず確認しましょう。

ある牧師が新しくA教会に赴任したとき、会員宅を訪問するのに、80代の信徒がずっと同伴したそうです。創立以来の古参信徒が一緒だったお蔭で、単に道案内してもらって助かっただけではなく、初対面の牧師と訪問された会員とが、スムーズに共通の話題を持つようになれたことでしょう。

B教会は、ひとりの牧師が兼牧していますが、遠く離れているので、牧師がやってくるのは礼拝のある土曜日だけです。では、それ以外の日は、会堂はがらんどうで、締めっきりでしょうか。いえ、高齢の信徒が週日はお留守番にやってくるのです。礼拝堂は開かれており、誰か訪ねてきても応対ができるのです。そのことがどれほど宣教にプラスか、ずっと後になればわかるでしょう。ちなみに、2004年現在、日本福音ルーテル教会に属する129の教会に対して教会担当の牧師は87人です。牧師が常駐していない（そこの牧師館に住んでいない）教会は42もあるのです。

●教会の働きを分担して担う

専従の事務担当者がいる教会は、全国で数えるほどしかありません。でも、C教会は、信徒の日直制を採りました。日替わりですが、週日、チームの内の信徒が一人やって来ます。そうすることで、牧師は安心して訪問などにも出かけられます。留守中も電話を受け、来客に対応し、事務処理も手伝います。これらはいずれも高齢の信徒たちの貢献です。

D教会では、その教会の仕事はみんなで分けて担っています。ある方は、毎週1回、教会中

のトイレのタオルをきれいなものと取り替える役目を引き受けています。その方の都合に合わせて、一週間のうちの適当な時間にやってきて、あちこちにあるトイレのタオル全部を、洗ってあるきれいなものに取り替えるのです。

どれもこれもなくてはならないこと、そういう働きがなされていると、会員であれお客さんであれ、誰もが気持ちいいことです。しかし、ひとりに負担がかかり過ぎないように、会員みんなが教会の仕事を手分けして、支えています。その結果、自分の奉仕が教会全体に役に立っていると実感できます。教会のためにどんな仕事があるかもみんなに見えます。

これらのおおかたの仕事は、以前は牧師夫妻が黙々とやっていたことでしょう。今はその分だけ楽になったというよりも、牧師でなければできないことに力と時間をかけられるようになったのです。教会全体としては、宣教のためのパワーアップができたのです。

●信徒の専門的な、得意な面を生かした貢献

上記の例にみられるような奉仕なら、そのように用いてくれさえすれば、喜んで働きたいと思っている信徒は少なくはないのです。とくに高齢になればなおのことです。なぜなら壮年・中年の時代は、なにしろ社会の中のさまざまな責任を数多く負わされていて、やる気はあっても時間がなかったのです。しかし、今は、体力は以前と同様ではなくても、**自由になる時間がある**のです。また、**人生の経験も重ね、信仰もいっそう深みを増してきています。長年培った専門性も生かせる**のです。

教員を退職したある信徒は、教会を借りてこどもたちの教育相談を始めました。ある方は、

広告業界で働いてきたノウハウを活かして教会のイベント興しに知恵を出しています。パソコンの得意な方は、教会の会計処理や月報作りに腕を振るっています。料理の腕自慢の方は、子育て中の若い女性たちを台所での奉仕から解放してくれています。教会で絵画や手話や俳句、詩吟の教室を開いた方もあります。医師だった方は、医療と宗教の関係を学び啓発するための会を運営しています。煙突職人だった方は、教会でストーブの煙突の付け替えだけでなく営繕に力を発揮されています。教会の庭を花で飾るために手入れの労を惜しまない庭いじりの名人もいます。これらは枚挙に暇がありません。**一つはっきり言えることは、どなたも生き生きと自分の時間を教会のため、神さまのために捧げておられる**ということです。これ以外のさまざまな例が、全国にいろいろあるでしょう。経験を分かち合いましょう。「あっ、それならうちでもできる。私もできる」ということが出てきます。

「教会が老人の溜まり場になって……」とぼやいてはいけません。高齢化社会の中で高齢者が集まってくる教会こそ、まさに時代のニーズに応えているのです。そして、来るべき高齢社会が「高霊社会」になるように貢献するのが、教会の大事な務めではないでしょうか。その貴重な担い手こそ教会の中の高齢者です。要は人を生かすことです。

●教会と教会のパートナーシップ

現在、日本福音ルーテル教会は「宣教方策21（PM21）」にのっとって、教会の持つさまざまな資源（人的、物的、財的）を有効に生かして、これからの福音宣教の展開をはかるべ

く、教会の統合を図っています。言い換えれば、現状維持に終始するのでなく、**宣教のための限られた資源を組み合わせ結集させることで宣教力を底上げしよう**としています。組織合同して「新教会」を形成するか、もう少し緩やかな「教会共同体」でいくのかは、個々の事情と全体の状況の中で決まっていくでしょうが、肝心なことは、各個教会が従来のようにそれぞれが**自己完結的にこぢんまりとまとまるのでなく、福音宣教のために、大胆に近隣の教会と力を合わせていく道を選び取った**ということです。要は、組織統合が目的ではなく、**宣教のための最善の態勢作り**（再編）を目指しています。

おおかたの教会では、教会学校が青息吐息です。青年会も活発とは言えません。そういうときに、近隣の教会（あまり離れすぎていると不可能ですが）と共同のプログラムを持つと、ひとつの教会では期待できなかった効果を上げることができます。子ども同士、青年同士の出会いと交わりから、彼らが信仰的に成長するのです。毎週は無理でも、良い刺激が与えられるのです。現在は、全国レベルや教区レベルでは活発なプログラムがありますが、地区レベルではそれほど盛んでもありません。もちろん、そのための準備も必要です。かえって、手間だと思われるかもしれません。しかし、次世代を育成していくためには必要な努力ではないでしょうか。

近刊のLAOS講座第6号「信仰継承」を参照のこと

若い人たちのためばかりではありません。婦人会や壮年会でもプラス効果はあるものです。特に、高齢者の集まりとか、障がいを持っている方たちの集まりと言ったらなおのこと、個々の教会では十分な数が揃いにくくても、力を合

わせると、１プラス１は２ではなく、３にも４にもなること請け合いです。

●牧師同士の連携

全国のルーテル教会の中で、北海道特別教区の道央地区だけでしょうが、札幌・恵庭両市にある４教会の牧師が毎週木曜日に定期的に集まり、説教の準備（翌々週の分）を一緒にするだけではなく、週報の共通部分を作るのです。信徒は、どの教会に属していても地区内の動きが分かり、一体感が培われます。月報も共通です。東海教区は、説教者の交流も盛んで、三河地区も地区内の諸教会は週報に共通の頁を持っていて、地区内の牧師のメッセージが順番に載っています。西中国地区なども合同プログラムが盛んです。講壇交換を行っている地区も増えてきました（こういう素地があると、統合問題も「宣教論的」に話せます）。

そうすることによって、以前は常識であった**「一教会一牧師」体制**（その結果、信徒はその教会の牧師（の説教）しか知らない）**は一変**しました。信徒にとっても新しい経験ですが、牧師にとっても「この牧場の羊は、私一人で牧する」という状況から、「複数の牧者」がいる事態に変化してきたのです。

このことを、牧師数不足による事態への緊急避難対応とだけ考えないでいただきたいのです。個々の教会の主たる責任を負う牧会者はいても、信徒たちは自分たちに関わる複数の牧師の異なる霊的賜物に接すると、それが会衆にとっても益することだと理解します。牧師集団にとっても**「共同＝協働」伝道・牧会に従事することで、一人でやっていたときよりも、個人としても、より成長するし、全体としても伝道**

力・牧会力が増したということを経験する機会です。

●複数の牧師と複数の会衆

使徒パウロの宣教旅行は、いつも同労者が一緒でした（第1回はバルナバと。第２回はシラスやテモテ、ルカを同伴しました）。ルーテル教会の最初の宣教地・佐賀に赴いたのは、シェーラー、ピーリー両米国人宣教師と、山内量平・幹枝夫妻の4人でした。邦人二人の牧師を擁する教会こそまだ少ないですが、日本人牧師と宣教師のコンビは、これまでもよくあったパターンです。

今後は、1教会に複数の牧師というよりも、**複数の教会**（あるいは制度上は「新教会」や「教会共同体」の諸礼拝所や諸教会）**に複数の宣教者チームが関わり、信徒たちは複数の牧者を持つ**ということが、少しも珍しいことではなくなるでしょう。「複数共同牧会」と言われてきたことが、やっと実体化しようとしているのです。

今は**ネットワークの時代**です。一人のあらゆる分野に秀でたスーパーマンを期待するのではなく、それぞれに異なる賜物を持った者たちがそれらを繋ぎ合い、分かち合っていくのです。イエスさまが弟子たちを派遣されたときも、「二人ずつ組にして」でした。牧師も信徒も、まだ「チームワーク」に慣れていないかもしれません。「おらが○○先生」という排他的な「師弟」意識が頭をもたげがちです。みんなでやるからといって、「総無責任態勢」になっても困りますし、同労者チームの中での「ホーレンソー」（報告・連絡・相談）がおざなりになっても、うまく機能しません。でも、まことの

マルコ6:7

「羊の大牧者」はイエス・キリストお一人です。牧師たちは、いわばその副牧師たちなのです。また、「キリストの体」という素晴らしい比喩によって示された**「教会有機体」論**を本気で信じましょう。

Ⅰコリント12、エフェソ1:23

●伝道・教育・福祉の宣教共同体

マタイ4:23、9:35

イエス・キリストのガリラヤでの宣教活動は、町や村を残らず回って「諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」と記されています。今風に言えば、**伝道と教育と癒し（医療や福祉）の包括的宣教活動**でした。十二使徒たちもそうでした。教会の歴史は、いつもそのことを心掛けてきました。日本でのルーテル教会の歩みもそうでした。1893年に佐賀で伝道を開始し、すぐに熊本へと展開していったあと、そこでは男子、女子の学校を始め、また身寄りのない高齢者、孤児、悲惨な境遇から逃がれてきた女性たちを引き取り、そのための施設を始めました。その後今日に至るまで、学校教育、幼稚園保育園、さまざまな社会福祉施設を建て、この社会に大きな貢献をしてきました。**直接的な伝道だけでなく、奉仕の業にも努めてきた**のです。まさにイエスさまの働きに倣った包括的な宣教活動です。

●各個教会も特別の使命を担う

一つひとつ挙げていけばキリがないのですが、注目すべきことは、各個教会レベルでも、幼児教育だけでなく、その地方固有の課題に取り組んでいる働きです。稔台教会のように学童保育を本格的に実施したり、知的あるいは精神障がい者と共に生きるための働きを、門司（光の子学園）、大垣（あゆみの家）、柳井（一粒の

麦)、佐賀（レインボーハウス)、挙母の元町（スモールワン）はじめ各種各様に、市民と協働しながら営まれていることです。日本福音ルーテル社団は、難民支援や国際開発、国際福祉の働きを進めています。規模や運営形態はさまざまですが、各個教会が、イエスさまに倣って、伝道を行なうとともに奉仕の働きを担ってきたのです。

●るうてる法人会連合

もともとは一つの社団組織の下に始められたルーテル教会の多様な宣教活動でした。戦後、法律の定めに従って、伝道は宗教法人、教育は学校法人、福祉は社会福祉法人に分割され、それぞれの枠内でやってきました。1970年の「自給」以降は教会と諸法人との経済的なつながりも薄れてきました。

2002年に、日本福音ルーテル教会と、ルーテル学校法人会（3法人)、ルーテル社会福祉協会(27法人)、ルーテル幼稚園保育園連合会（50園）は、新たに「るうてる法人会連合」を結成して、組織や運営形態こそ違え、**全体として福音宣教の働きなのだということを再確認**し、信仰的には言うまでもなく、**可能な限り多くの場面・レベルで協力し合って**、この世にあって**「宣教共同体」として生きていく**ことを誓いました。まさに原点の確認でした。これから、法人（会）のレベルでの協働だけでなく、個別の施設と各個教会といった**草の根レベルでの協働**を目指していきたいものです。

施設の側も、教会に協力するのはもちろんですが、なにより、教会は施設も福音宣教の一翼だということ、その働きは各個教会での伝道と同じく宣教の最前線（ミッション・フロンティ

ア）だということを、正しく認識し位置付けねばなりません。そこでの働きに「聴き」、ということは、働きの対象者たちの持つ「求め」、つまり神さまが関わっていこうとされている**人々の「声」を「聴き」**、同時に、働き人たち（クリスチャンもそうでない人も含めて）を**「支え、労い、祝福し、力づける」**ことが大切です。施設の側が期待しているのは、なにより**霊的・精神的な関わり**なのです。**働き人も支え手も送り出さなければなりません。**

〈まとめ〉

福音宣教のために信徒ができる奉仕は多種多様。牧師と信徒、牧師同士、教会と教会も連携するとき、その力は倍増する。主イエスの宣教活動は包括的。それに倣って、教会は伝道と共に、教育や福祉の施設と協働して宣教共同体を形成していく。

〈話し合いのために〉

① 初めて教会に来られた方に、どう対応したら一番適切か、あなたの教会でのその配慮、やっていること等を語り合ってみましょう。

② 教会での役割分担が一つの宣教活動です。宣教のパワーアップのため、その役割を考えてみましょう。現在やっていること、これから出来そうなこと、高齢の方が過去になさったことも傾聴しましょう。その中に貴重なヒントがある筈です。

③ 高齢の信徒の方が集まりやすい教会になっているか、そのためには何が必要か、アイデ

アを出し合って下さい。

④「一教会一牧師」体制から今や「複数共同牧会」に変って行く時代、私たちは「羊の大牧者」はイエス・キリストお一人という礎を確固として、教会の働きに広い視野を持ちたいものです。パートナーシップは活きていますか。

4．牧会的カウンセリング

●世は挙げてカウンセリング流行り

難しい事件が起こるたび、心の対応のためにカウンセラーの登場が要請されます。学校でことが起こると、スクールカウンセラーの配置だといいます。結婚カウンセリング、カルトからの救出カウンセリング、キャリア・カウンセリング、美容カウンセリング……何にでもカウンセリングという言葉が使われ、しかもそこには専門職の仕事という響きがあります。「カウンセリング」とは、例えば広辞苑には「個人の持つ悩みや問題を解決するため、専門的な方法により助言を与えること。個人指導。身上相談。」とあります。しかし、果たしてこのカウンセリング流行り、カウンセリングの氾濫は、キリスト教会に連なる信徒にどのような意味があるでしょうか。クリスチャンや教会で使われるカウンセリングというものと、巷に溢れるカウンセリングとは何か違いがあるのでしょうか。

教会では、牧会とか司牧と日本語で言いますが、「羊の群を牧する」ことからとられた「牧師の務め」の一部としての牧会カウンセリング。牧会は、ドイツ語では直訳すれば「魂の配慮」です。

●聴くことに徹することの大切さ

カウンセリングの基本として先ず叩き込まれるのは「受容」と「傾聴」です。**是非善悪の判断を差し控えて、無条件に、相談に来ている相手を受け入れること**、これが「**受容**」でしょう。ひたすら自分の心の中に渦巻く思いを訴えているときに、聞く側が自分の持っているこれまでの「経験」から先を見通し、**その人にさっさと「答」を与えてしまうことをしないで、そ**

れこそひたすら相手の言葉に耳を傾けること、これが「**傾聴**」です。このふたつ、「傾聴」と「受容」とは、言うは易く行なうは難しなのです。本当に難しい。なぜなら私たちは、とりわけ「善意」に満ちたクリスチャンは、「かわいそうな」「迷える小羊」である相手を助けたくて、「正解」あるいは「真理」を一刻も早く「教えてあげよう」とするのです。ですから、「傾聴」しないし、「受容」してないのです。

人間に**口は一つしかないのに、耳は二つある**ことが暗示していることは大事です。話すことの二倍聴かなければ！相談に来る人の中には、判断に迷っている人もいるし、自分の中では既に答が出ている人もいます。でも、「聴いてもらいたい」。そういう場合なら、訳知り顔に「正解」を教えようとすれば、相手が求めているものとは違うことになります。ときには逆になります。そんな「答」は不必要だし役に立たないのです。ひたすら聴くことです。判断抜きに！**辛抱が要ります。訓練がなくてはできません。**

隣人の言葉に耳を傾けない人でも、神さまの言葉には耳を傾けるというのでしょうか。そもそも、私たちが神を愛するというとき、一体全体どうしたら神を愛せるようになったのでしょうか。それは、取りも直さず、神さまのみ言葉を聴いたからです。その方が語る言葉を聴かなければ、その方がどういう方であるかがどうして分かるでしょう。「神の言葉」であるイエス・キリストに聴かなければ、神さまの心は分かりっこないのです。今、**目の前の人を愛することができるためにも、先ずはひたすら聴かなくては！**

自分なりの答を持っていながら相談に来る人もいます。しかし、心底迷っている人もいます。でも、その人も自分の話をじっくり聴いてくれる人がいたら、そして、その過程で自分自身が本当は何を望んでいるか気付いてきたら、**自分で答を出すこともできるし、出した答を実践することもできる**ことが多いのです。けれども、答そのものは同じでも、自分がやっとたどりつき、納得した答と、人から与えられた答では、その人の腹への収まり方が違うのです。その人が決断するときの、また実践に移すときの力の出具合がおよそ違ってくるのです。そこにいたる**過程がとても大切**です。

カウンセリングでも、強調される言葉の一つに「あるがまま」というのがあります。**「あるがまま」の相手を受け入れる、「あるがまま」の自分自身を受け入れる**、このことです。

●共に喜び、共に泣く

カウンセリングの基本の一つは「共感」です。同情と似ているけれども、微妙にニュアンスが違うかもしれません。ローマ書のあの言葉

ローマ12:15

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」を拳々服膺しましょう。教会でよく耳にする美しい言葉ですけれども、その実践は案外難しいのです。ですが、「傾聴」し「受容」したら、どうしてもこの「共感」も身につけなければカウンセリングは成功しません。逆に言えば、これさえできるようになると、もう大丈夫でしょう。

キリスト教は「愛」ということを耳にタコができるほど語ります。傾聴すること、受容すること、共感すること、これこそ**愛することの具体化**なのです。愛するということは観念ではあ

りません。心に重荷を負っている隣人へこのようにして関わることで、愛は愛になるのです。

●横の関係から縦の関係への気づきに

牧会的カウンセリングは、人間関係の問題を解きほぐすことで落着するのではありません。いえ、人間の抱えるトラブル、悩み、苦しみは**究極的には神さまの前での解決（赦しの宣言）を抜きにしては、真の解決はない**ことを私たちは信じています。でも、具体的な問題に取り組む過程を抜きにして、最初から神の赦しの宣言では、ありがたいようで、実は何の力にもならないのです。けれども、横の関係に真摯に取り組み、その過程で他者理解を深め、そして自己理解ができるようになったときに、そのような自己が神さまに無条件で受容していただけることが、その人にとって、その人の存在と魂にとって、なくてはならない最終解決だということを知るのです。しかも感謝を持って。神の無条件の受容とは、聖書が語る赦しであり愛なのです。イエス・キリストの十字架と復活によって、私という、またトラブルの関係にある他者という罪人を神さまが無制約的に赦し、無制限に愛してくださっていることに他なりません。

牧会的カウンセリングは、**心理学的な手法**を用いますが、**そのことが可能になる根底を聖書のメッセージに持っている**のです。しかも、カウンセリングにあたる私たち自身をも無条件に受容していただいていること、キリストが私に共感していてくださることによって、相談相手に関わり続ける不思議な力を与えられているのです。聖霊の賜物というべきでしょう。

このような牧会的な関わり方を通して初めて、相手が信徒の場合であれ、未だ信仰に入っ

ていない人であれ、誰であれ、究極の解決が示されるのです。ただ「ああ、いいよ」「なんでもいいよ」と言うのではなく、キリスト教に基づくカウンセリングが成立し、相手の命を生かすことに貢献するのです。**最後の結果を聖霊の御手にお委ねしながら。**

●「素人」にもできるし、やらなければ

この章の冒頭に書いたように、カウンセリングという言葉には専門性の要求が含まれているようです。では、牧会カウンセリングの専門家である牧師はいざ知らず、専門の訓練を受けていないふつうの信徒には無理なこと、むしろ手を出さないほうがいいことでしょうか。結論から言えば、そういうことはありません。ここまで述べてきたように、**三つの基本にどこまでも忠実であろうと心がけながら関わるとき、それは誰にでもできることでしょう。**愛するということは免許も資格もいりません。傾聴・受容・共感は、人が人である限り、私たちがキリスト信徒であろうとする限り、誰もがするべきことだし、できるはずです。

もちろん、**訓練が必要**です。実践の中での訓練が。そして、やはり人の魂に関わることですから、下手にいじくって傷つけてはいけません(場合によっては、相手を傷つけたことにさえ気づかないのです)。プライバシーは尊重しなければなりませんが、できたら本人の了解を取っておいて、牧師に報告し、相談することです。適切な関わり方をアドバイスしてもらうことです。どんなカウンセラーでも、プロになるのに何百時間というスーパービジョン（指導）付きの実践を重ねるのです。一人で抱え込むことは教会的ではありません。そして、**福音のメ**

ッセージが出るには、ふさわしい出る幕があります。早すぎても遅すぎてもいけません。でも、最後には、一緒に祈ってカウンセリング・セッションを終りたいものです。前節の結びでも述べたように、最後は神さまの御手に委ねるのです。

〈まとめ〉

牧会的カウンセリングもまた、傾聴、受容、共感を大切なこととして重要視する。それはキリスト教が最も重んじる愛の具体化である。人間関係をめぐる事柄から出発するが、神関係において究極的な解決がある。聖霊に委ねつつ、信徒もこのわざに関わる。

〈話し合いのために〉

① カウンセリングは、ひたすら相手を受容する、傾聴することが大切とされています。あなたは良い聴き手ですか。自分の価値観を押しつけていませんか。「あるがまま」の相手を受け入れていますか。

② 「共感」するには何が大切でしょうか。共に考えてみて下さい。

③ 相手の命を生かすことに貢献するカウンセリングとはどういうことでしょうか。カウンセリングの専門性については専門家でなければわかりませんが、私たちは共に喜び、共に泣く心で、相手のお話に耳を傾けたいものです。それぞれの体験から語り合ってみて下さい。

教会のディアコニア

松隅　貞雄

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるためにきたのである。」(マルコ10:45)

1．ディアコニア

ディアコニアとは、ギリシャ語で「仕える」という意味の言葉です。この言葉で、イエス・キリストの「神と人とに仕え、人の救いのために、命を献げる」生き方が示されています。このような生き方を示す適当な日本語がありませんので、ディアコニアという聖書の中の言葉を用いて、神と人とに仕える生き方を示すのです。

神はこの世を愛し、御子イエス・キリストをこの世に遣わし、御子は父なる神の御心に従い、人に仕え、人を救うために命を献げてくださいました。御子は、この世から父なる神のもとに移るときが来たことを悟られたとき、夕食の席から立ち上がり、弟子たちの足を洗い、「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」とおっしゃり、また「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という掟をお与えになりました。この掟が守られるときに、ディアコニアは起こるのです。また、残される弟子たちのために、弁護者である聖霊を遣わすという約束をしてくださいました。聖霊は来てくださり、五旬祭の日に教会を誕生させてくださいました。

2．教会の歴史の中で

a）教会は、み霊の働きによって誕生し、霊の賜物に満ちています。(使徒言行録2:1-4、Ⅰコリント12:4-11)

b）教会はキリストの体です。(Ⅰコリント12:12-28)

(1)新約聖書の中から

使徒言行録6章には、貧しい人々を世話するために、7人の世話人が選ばれています。彼らは、必要に応じて、説教をしたり、牧会に当たったようです。ローマの信徒への手紙16章では、教会の奉仕者、人々の援助者として、フェベという女性が紹介されています。

⑵初代教会

監督たちがディアコニアの責任を持ち、孤児の家、貧しい人の家、盲人の家、やもめの家、病院、旅行者のための宿泊所、看護所などの総合施設を管理していました。

ディアコニッセ（生涯、奉仕に献身する女性）は、婦人たちの洗礼準備や、礼拝における婦人・子どもの監督や教育のためにおかれました。また、牧会や、家にいる病人の看護、クリスチャンではない家族の中にいるクリスチャン婦人たちのために奉仕し、他に、貧しい人を助けたり、旅行者の面倒を見たりもしました。また、聖餐式の後で、聖餐を病人の家にも届けました。

⑶中世

修道院がいろいろな奉仕を引き受け、ディアコニアは専門家の仕事になり、「善き業」は、自分の魂の救いのためになりました。

⑷宗教改革時の教会

神の恵みによって宗教改革が起こり、「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ」の教会が生まれました。教会は、この福音的教理を守るために、世俗の勢力からの圧迫、およびカトリック教会からの攻撃に対して、激しく戦わなければなりませんでした。その結果、その後の時代には、教理、諸々の規則や組織などが異常に硬化し、精神までも柔軟性を失うに至りました。

⑸信仰復興運動（18、19世紀）

教理や組織が硬化し、精神までも柔軟性を失う中で、神の霊は生きて働いてくださり、ツィンツェンドルフ、フランケ、ベルデルのような、霊の力に溢れた人々を輩出させました。人々の霊的覚醒を起こし、罪を深く自覚させ、人々はキリストによる罪の赦しを知り、隣人の困窮に対する責任をも強く自覚するようになりました。霊的に覚醒した人々が、伝道会や奉仕会を作るようになるのです。また、18世紀末に始まった産業革命による社会変化によって、社会に大きな困窮が生じました。この困窮に対して、ディアコニアがなされました。

以上は、ヘンシェル先生の論文によりました。

3．日本福音ルーテル教会の働き

⑴施設の建設

1923年（大正12年）９月１日、関東地方に大震災が発生すると、教会は救済委員を任命し、老人や母子救護のために、老人ホームや母子ホームを建設しました。その活動は現在、東京老人ホーム、社会福祉法人ベタニヤホームが受け継いでいます。ハンセン病に対しては、パウラス女史やエカード女史等が救済活動に関わりました。1937年、九州救らい協会理事に就任された神水教会の潮谷総一郎氏と、室園教会の江藤安純氏は、キリスト教の伝道と、生活改善を図るために、ハンセン病患者を訪問されました。また、久留米教会の池尻慎一医師は、熊本回春病院、東京全生病院での体験を元にして、「傷める葦」を書かれました。

第二次世界大戦では、多くの戦災孤児が生じました。このことに対応するために、広安愛児園、別府平和園が設けられました。

⑵ディアコニアを推進させた方々

日本福音ルーテル教会で、最初に組織的な社会福祉事業を始めたのは、アメリカの婦人宣教師パウラス姉妹でした。姉、モード・パウラスは、1918年に来日し、熊本の慈愛園で、子供ホーム、婦人ホーム、老人ホーム等を創設しました。妹、エーネ・パウラスは、姉と共に慈愛園で働いた後、1930年から、東京および千葉のベタニヤホームで、母子家庭や子どもたちのために働きました。

1953年、ドイツからエリザベート・ストローム宣教師が来日し、1964年から20年間、釜が崎で、子どもたちや労働者、アルコール依存症の人々のために働きました。

1960年、ドイツからヨハンナ・ヘンシェル宣教師が来日し、主に重症心身障がい児とのキャンプ活動を通して、教会の中にディアコニアの心を教えてくださいました。

これらの働きは、慈愛園、ベタニヤホーム、喜望の家、北軽井沢ディアコニア・キャンプ等で継承され、豊かな稔りをもたらしています。

かつて慈愛園で働いておられた潮谷義子熊本県知事は、全国ディアコニア・ネットワークのパンフレットのために、「私のディアコニアとの出会い」という次の一文を寄せてくださいました。「私がディアコニアを知ったのは、1972年（昭和47年）のことでした。慈愛園パウラスホーム（特養）で奉仕されていた、デンマークのディアコン、ディアコニッセのマルムグレン御夫妻の働きでした。御夫妻はここで５年以上も奉仕されました。仕えるということをしっかり学びました。イエス様がとる

にたらない私達に仕えたようにと、マルムグレン先生をとおして、ディアコニアのモデルを学びました。」と、まず記されています。そして、どのような事を学んだかを、具体的に記し、その後「マルムグレン先生をとおして、私はディアコニアの実践を深く学びました。これからも学んだことを生かしていく覚悟でいます」と結んでおられます。

4．ディアコニアの心

(1)「互いに隣り人」

1965年に始まった東教区のディアコニア・キャンプは、「互いに隣り人」というテーマにたどり着きました。このキャンプの生みの親、ヘンシェル先生は、キャンプで初めて障がい児に会い、ショックを受けた人に対して、このショックに関して、1974年３月に発行された「ディアコニア研究」で、次のように記しています。「極端に言えば、初めて唾のいっぱい付いた手でさわられたこと、あの薬のにおい、さらに、あの（一見何を考えているのだか分からない）顔の表情ではなかったでしょうか。それは外面的なことです。もちろんそれらに対処することは必要ですが、実はそれを通して、十字架のイエスとのぶつかり（”出会い”では表現が生易し過ぎよう）を交えようとしていたかと、今、深く反省させられます。」

ヘンシェル先生は、障がいに苦しむ人々に、その家族に、助けを必要としている人々に、貧しい人々に、十字架に付けられた方・キリストを見たのです。その人たちに、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして関わってくださったのです。こうして、ディアコニアは、十字架に付けられた方とのぶつかりの中で担われるのです。

(2)十字架の下でのディアコニア

1998年６月４日から20日にかけて、私は、ドイツのブラウンシュバイクの教会と、ディアコニアの奉仕をしてくださったヘンシェル先生の妹さんたちの招きで、ドイツの教会へディアコニアの見学に行きました。まず、ドイツに入る前に、ポーランドのアウシュビッツ強制収容所を訪ねました。ガス室、立牢、絞首台、銃殺場、死体焼却場、残された靴、トランク、眼鏡、義足等の山々は、そこがかつて、ユダヤ人というだけで、あるいはナチに抵抗しただけで、家畜のように扱われ虐殺された、屠殺場であったことをありありと思い起こさせます。二重の鉄条網の外

にある焼却場を訪れる人はほとんどいませんでしたが、焼却口の前には、イングランドの人によって花輪が捧げられてありました。添えられた紙片には「You will not and must not be forgotten 4.3.98（あなたがたは忘れられないでしょうし、また忘れられてはなりません。1998年3月4日)」と書いてありました。

アウシュビッツを後にした私たちは、ヘンシェルさんの案内で、6月17日に、福音ルーテル教会の施設があるアルスター村（Alsterdorf）を訪問しました。ここには、教会をはじめ、障がいを負った方々が働いている農場、金具や木工の工場、レストラン、自転車屋、また、奉仕者を育てる専門学校、病院、居住棟などもあり、それぞれの施設責任者が案内してくださいました。ここで作られているおもちゃは特許製品で、日本にも輸出されていました。教会の鐘の音を聞き、生活し、働くのです。

ここの定款こそが、ディアコニアとは何であるかをよく伝えていると思いますので、引用させていただきます。この定款は、1992年10月16日にハンブルク市議会で認可され、1993年7月7日および1995年6月30日に改定されたものです。

「この施設は、ディアコニアの施設であり、福音ルーテル教会の中で、示されているように、イエス・キリストの福音に基づいて、病人や障がいを負うものに、援助を提供する。それは、次のように表現される。

『神は、御自分にかたどって、人を創造された。すべての人の尊厳は、神によって添えられている。その尊厳は、それゆえに不可侵である。それは人の業績や能力に根差していない。それは、人間の弱さ、病気、障がいによっても侵されない。』」

この施設にも痛ましい歴史がありました。ヒトラー政権下で、この施設の障がいを負った方々が殺されたのです。その記念碑には、新しいリボンが飾られ、花が添えてありました。アルスター村の人々は、十字架に付けられたキリストを仰ぎつつ、ヒトラー政権下で殺された人々のことを決して忘れず、記念しつつ、教会に連なる活動として働き、生活しておられるのです。そして、殺された方々を忘れていないこととして、定款に「神にかたどって創造された人間の尊厳は不可侵である」という文章を掲げられたのではないでしょうか。

十字架の下にあるディアコニアは、十字架に付けられた方のあがない

の恵みを信じ、聖書の言葉に養われる人々によって担われています。苦しみを分かち合い、苦しみを受け入れ、苦しみを引き受けることを意味し、復活された方の現臨とその力によって現実の出来事となるのです。

5．全国ディアコニア・ネットワークの働き

a）キリストの心に基づいて、人々と社会に仕えるディアコニアの働きを担っている諸活動体の連帯を図り、共々に成長すること。

b）日本および世界に対するディアコニアの働きを、より良く促進すること。

c）教会内にディアコニアの精神を広めること。

上記の事項を目的として発足した、ディアコニア・ネットワークのセミナーでは、各地でディアコニアを担っている方々が、ディアコニアの現場である下記の施設を会場に、ほとんどの場合、施設内の宿泊所、あるいは教会に泊めていただきながら、ディアコニアの心に触れ、研修を深めてきました。

施設：デンマーク牧場こどもの家、保谷教会、東京老人ホーム、喜望の家、あゆみの家、京都教会、修光学園、健軍教会、広安愛児園、熊本ライトハウス、熊本ライトハウスのぞみホーム、ピースハウス・ホスピス、慈愛園パウラスホーム、長島曙教会、長島愛生園

2004年は「福祉村」特別養護老人ホームディアコニア、デンマーク牧場こどもの家を会場に予定しています。

また、「環境と人権」セミナーも開催するようになり、2004年2月の第4回セミナーでは、参加者が自分たちにできること等の意見を基に、「環境宣言」を作成しました。

6．結び

祭司としての牧師の職務が、万人祭司に基礎を置くように、ディアコニアは、すべての信仰者の普遍的なディアコニア、日常の生活の中で行われるディアコニアに基礎を置いています。キリストの体である教会と、その肢体である教会員一人ひとりの働きは切り離せません。人がイエスの名によって集まり、聖霊の力によってお互いのために存在するとき、教会が存在します。また、互いに自分の賜物と力をもって仕え合うとき、ディアコニアが実現するのです。

あとがき（LAOS講座第7号「宣教と奉仕の理論と実際」）

● 「証し、奉仕する信徒になろう」を合言葉に歩みだしたPM21の第2プロジェクト（P2）の大きな柱の一つである「LAOS講座」シリーズの新刊号をお届けします。すでに創刊号「信徒として生きる」を用いて学び会や修養会などを行っている教会も多くあることでしょう。キリスト者として召され、教会の兄弟姉妹方との交わりの中に入れていただいた私たちが今こそ信徒としての自覚に目覚め、社会に仕える使命を持ってさらに成長してゆきたい。そんな思いでこの号も編まれました。

● 本号の、教会は「宣教共同体」・神の民・「教職と信徒」・宣教と奉仕の具体像・牧会的カウンセリングは江藤直純委員（日本ルーテル神学校長）が執筆しました。

復活のキリストから宣教の委託を受けた私たちは、神の民として生活の場所に遣わされ、そこで出会う人々に主の恵みを言葉と行いとをもって伝えることが求められています。そのためには教職と信徒、教職同士、また教会と教会との賜物を生かし合った深い連帯がますます必要になってきます。また、私たちが出会う人との対話をより深いものにするために牧会カウンセリングの知識も大切なことです。

● 本号では、教会のデイアコニアと題して松隈貞雄牧師（三原・福山教会牧師）に執筆を依頼しました。地の塩として社会に遣わされている私たちが「デイアコニアの心」を持って具体的に奉仕する場所は数多くあります。巻末には現在「デイアコニア・ネットワーク」に加入している奉仕活動の一覧が記されていますので、是非自分たちにできる奉仕を考える上での参考にしていただきたいと思います。

● 「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ12:15）。私たちがそれぞれの生活の中で生きることの恵み、喜びを振り返り、かみしめ、このみ言葉をそれぞれの教会で今一度味わいましょう。

創刊号でもなされたように、本号をテキストにした各教会での兄弟姉妹による学びが今回も活発に行われますように。話し合いや互いの

経験の分かち合いから、私たちの心の中にさらに深い宣教への情熱が生まれることを願っています。そしてそこから一歩進んで、具体的に私たちが自分に求められている働きに応え、新しい心で宣教と奉仕の最前線へと主から押し出されてゆきたいのです。LAOS（神の民）として。

（P2委員長　齋藤末理子）

全国のルーテル教会関連の社会福祉の働きを広く知っていただくために、全国ディアコニア・ネットワーク、ルーテル社会福祉協会、各教区教区長のご協力をいただいて、このリストを作成いたしました。

付表１：日本福音ルーテル教会と関わりのある社会福祉の働き（保育園を除く）

教区	法人・施設	問合せ先
東教区	日本福音ルーテル社団	03-3260-8637
	ほしくずの会	03-3268-7857
	社会福祉法人ベタニヤホーム	03-3631-0444
	すみだ子育て相談センター	03-3621-6455
	母子生活支援施設ベタニヤホーム	03-5600-4328
	わかちあいプロジェクト	03-3634-7809
	社会福祉法人東京老人ホーム	0424-61-2230
	東京老人ホーム（養護）	0424-61-2230
	東京老人ホーム泉寮（軽費）	0424-61-2230
	めぐみ園（特養）	0424-61-2230
	めぐみ園在宅介護支援センター	0424-67-2794
	西東京市高齢者センターきらら	0424-51-1203
	特定非営利活動法人あけぼの会	0426-92-0204
	社会福祉法人千葉ベタニヤホーム	047-372-3740
	旭ヶ丘母子ホーム	043-231-4823
	国府台母子ホーム	047-372-1473
	市川市立母子生活支援施設曽谷寮	047-373-8732
	船橋市夏見母子ホーム	047-423-2176
東海教区	社会福祉法人デンマーク牧場福祉会	0538-23-0380
	特別養護老人ホーム　ディアコニア	0538-23-0380
	デンマーク牧場こどもの家	0538-23-4119
	スモールワン	0565-28-0567
	社会福祉法人あゆみの家	0584-22-4333
西教区	ディアコニアセンター喜望の家	06-6632-1310
	社会福祉法人るうてるホーム	072-878-9371
	軽費老人ホーム	072-878-9371
	特別養護老人ホーム	072-878-9371
	サービスセンター	072-878-0686
	社会福祉法人修光学園	075-702-1700
	「共に生きる」集い	075-781-3903
	ふれあいショップ一粒の麦	0820-23-7659
	障がい者問題を考える集い「一歩の会」	0832-22-6980
	社会福祉法人身体障害者通所授産施設「心促福祉作業センター」	0835-22-8530
	ちいろば会	0836-44-0212
	社会福祉法人サマリヤ　特別養護老人ホーム西春日	087-869-1165
	ルーテル作業センタームゲン	089-996-7701
九州教区	社会福祉法人光の子会	093-332-4799
	ひかり工芸舎谷町分場	093-332-0030
	光の子学園	093-332-0515
	ひかり工芸舎	093-391-8677
	障害者福祉作業所「レインボーハウス」	0952-24-1437
	社会福祉法人キリスト教児童福祉会	096-331-0210
	こどもLECセンター	096-331-2010

	広安愛児園	096-368-2015
	社会福祉法人慈愛園	096-383-4515
	熊本ライトハウス	096-368-2013
	熊本ライトハウスのぞみホーム	096-369-9604
	家庭福祉相談所	096-381-4848
	慈愛園老人ホーム	096-383-2648
	慈愛園子供ホーム	096-383-3509
	慈愛園乳児ホーム	096-383-5100
	在宅介護支援センター	096-383-7165
	パウラスホーム	096-384-1727
	慈愛園デイサービスセンター	096-384-3961
	慈愛園ケアハウス	096-387-2941
	シオン園	0968-62-0428
	センターラム	0973-27-5477
	社会福祉法人別府平和園	0977-66-3121

※それぞれの施設は必ずしも記載されている教区所属というわけではありません。
分かりやすくするために連絡先所在地があるところに分類し、記載しております。

付表２：日本福音ルーテル教会と関わりのある幼稚園・保育園（幼保連合会加盟）

幼 稚 園(29園)	問合せ先	保 育 園(21園)	問合せ先
めばえ幼稚園	011-561-0485	鶴ケ谷希望園	022-251-4654
雪ケ谷ルーテル幼稚園	03-3727-5419	福室希望園	022-786-5650
蒲田ルーテル幼稚園	03-3731-4437	田子希望園	022-786-2040
田園調布ルーテル幼稚園	03-3722-2889	国府台保育園	0473-72-3740
大岡山幼稚園	03-3729-6500	旭ヶ丘保育園	043-231-5047
大森ルーテル幼稚園	03-3772-2905	菊川保育園	03-3633-1888
ルーテル羽村幼稚園	0425-54-6351	富士見保育園	03-3657-0515
飯田ルーテル幼稚園	0265-22-2213	ルーテル保育園	03-3657-3326
挙母ルーテル幼稚園	0565-32-1764	桜ヶ丘保育園	0265-83-3640
名古屋ルーテル幼稚園	052-731-4734	箱舟保育園	052-823-3040
こひつじ園	0568-91-0244	のぞみ保育園	075-492-2044
真生幼稚園	06-771-0153	メグミ幼児園	075-791-0578
谷の百合幼稚園	082-251-6351	ルーテル保育所	082-241-2479
西条ルーテル幼稚園	0824-22-2252	松崎保育園	0942-72-6537
門司幼稚園	093-321-0800	奈多愛児園	092-606-2307
恵泉幼稚園	092-651-5723	シオン園保育所	0968-62-0853
日善幼稚園	0942-32-4037	ひかり幼児園	096-364-1073
甘木聖和幼稚園	0946-22-3400	愛光幼児園	096-364-0134
日田ルーテル幼稚園	0973-22-3865	白羊保育園	096-352-6365
唐津ルーテル幼稚園	0955-72-2518	愛泉保育園	096-242-0789
牛津幼稚園	0952-66-0347	清泉保育園	0968-26-4070
小城幼稚園	0952-72-3221		
佐賀幼稚園	0952-23-6512		
玉名ルーテル幼稚園	0968-73-4096		
九州学院みどり幼稚園	096-364-4405		
ルーテル学院幼稚園	096-343-3968		
神水幼稚園	096-383-2727		
めぐみ幼稚園	096-368-2322		
さわらび幼稚園	0966-62-2613		

LAOS講座　第7号　宣教と奉仕の理論と実際

発行日　2004年10月31日

編集者　PM21　第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会
委員長　齋藤末理子

著　者　江藤直純　松隅貞雄

発行者　「日本福音ルーテル教会宣教方策21」（PM21）推進委員会
宣教室長　推進委員長　徳弘浩隆

発行所　日本福音ルーテル教会　宣教室
〒162-0842　東京都新宿区市谷砂土原町1-1
電話：03-3260-1908　FAX：03-3260-1948
e-mail　mission04@jelc.or.jp

印刷所　精文堂印刷株式会社